● 文学

「三十歳」の神話

小黒　康正

ひとは三十にして立つ。十五歳で学問を志した孔子は、三十歳になると、新進気鋭の学者として自信を得ました。そこで初めて人生の展望が開け、四十歳で心に惑いが無くなり、五十歳で天から得た使命を悟ったようです。これに対して、ゲーテ『ファウスト』(1832年) 第二部第二幕に登場する得業士は、同じく新進気鋭の学者とはいえ、かなり自信過剰な男でした。恩師ファウストに対して不遜極まる辛辣な言葉を吐きます。

人間、三十歳を越したら、
もう死人同然ですな。
潮時を見てあなた方は叩き殺してしまうに限る。

ゲーテ『ファウスト　第二部』
(高橋義孝訳)

三十歳ともなればすでに老人、さっさとあの世に送り出してしまうのがよいとかつての弟子は言います。老師は唖然としますが、但し驚愕したのはファウスト本人ではありません。実は老学者に化けたメフィストーフェレスなのです。その老獪な彼が一言、「はてさて、悪魔も開いた口がふさがらぬ」と。

もっともドイツ文学には、得業士の言葉を実現させる小説があります。カフカの『審判』(1925年) です。銀行員ヨーゼフ・Kは、三十歳の誕生日を迎えた朝、見知らぬ二人の男に「逮捕」されます。とはいえ、主人公は特に身柄を拘束されるわけでもなく、また、ある裏長屋で行われた奇妙な審理を拒否した後、次の審理に呼び出されることもありません。しかし、訴訟手続きは暗黙の内に進んでいます。その事を知った主人公はあらゆる対抗措置を講じますが、何も功を奏しません。そして「逮捕」から一年後、誕生日を迎える前夜、二人の男に自宅から郊外の石切場に連れ出され、みずからの罪状を知らぬまま、まるで「犬」のように肉切り包丁で呆気なく処刑されてしまうのです。カフカの未完小説は私たちに言い知れぬ読後感をもたらします。人間は三十歳を機に何か根源的な罪に陥るのでしょうか。メフィストーフェレスは「悪魔は年寄りだ」と言いました。三十歳を過ぎると、人間は悪魔に近づくのかもしれません。

而立は、『魔の山』(1924年) においても、死と深く結びついています。トーマス・マンの小説は、スイスの国際結核療養所を舞台とし、ハンス・カストルプの1907年から1914年までの滞在を描く作品です。主人公は従兄弟を見舞うために三週間の予定で結核療養所を訪れますが、自身も肺を病んでいることがわかり、長期滞在を余儀なくされます。そこで彼が見たのは、微視的には世界各国から集まる患者たちの自堕落な生活と死が日常化した日々であり、巨視的には第一次世界大戦前のヨーロッパの社会的・政治的・精神的行き詰りでありました。とはいえ『魔の山』は主人公がさまざまな人物との出会いと自らの精神練成を経て「高揚」していく過程を描きます。その

結果、「単純な若者」と称される主人公が、時間とは何か、生とは何かを問い、「生へ赴く道はふたつある、ひとつは普通の、真直ぐな、真面目な道、もうひとつはよくない道、死を越えていく道で、これが天才的な道なんだ」と吐露するに至るのです。しかし、第一次世界大戦が勃発すると、七年間の「錬金術的高揚」がまるで無意味であったかのように、主人公は山を下り、戦場でシューベルトの『菩提樹』を口ずさんで突撃し、爆弾の炸裂とともに消えてしまいます。但し、気になるのは語り手の言葉です。この歌のために死ぬ人は「愛と未来との新しい言葉を心に秘めながら、新しい世界のために死ぬ」のであり、その人は「英雄」であると。マンの代表作は、物語の「主人公」がエロスとタナトスの密封空間の中で錬金術的高揚を経て一人の「英雄」になっていく過程を描きながら、こうした変容の意味を我々に問います。このとき「単純な若者」は三十の齢に達していました。

ちなみにマンの深山幽谷には『ツァラトゥストラはこう言った』(1885年)に対するパロディーがあります。ニーチェの代表作はヨーロッパの没落を背景としながら超人思想が展開される作品であり、主人公はゾロアスター教の開祖と称されている人物です。実は、山にこもっていた古代ペルシアの賢人が山をおりて布教活動を始めるのは三十歳でした。また、『審判』や『魔の山』の他に、リルケ『マルテの手記』、デーブリーン『アレキサンダー広場』、ムージル『特性のない男』、ブロッホ『夢遊病者たち』など、二十世紀ドイツ文学を代表する小説でも、三十という齢が人生の転回点として重要な働きをしております。これは単なる偶然なのでしょうか。

マンは1936年の講演『フロイトと未来』の中で、前人の轍跡を踏む反復としての生を「生きられる生 Gelebte Vita」と命名し、それが卓越した人物においてダイナミックに現出することを指摘しています。例えば、ナポレオンはアレクサンドロス大王やカール大帝を、クレオパトラはその死に至るまでアプロディーテをほとんど意識せずに模倣したと言うのです。意識は無意識によって突き動かされ、個性的なものの中に典型的なものが宿り、両者が混淆します。更にマンがあげるイエス・キリストの例も興味深いです。イエスは十字架上で息を引きとる前に「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫びました。この叫びは、メシアとしての「生きられる生」の中に突如としてイエスの肉声が入り込む瞬間であり、一回的・個人的生が典型的・非個人的生を凌駕する瞬間です。しかしながら、ことは単純ではありません。そこには意識と無意識の分ち難い混淆があり、同時に逆転の構図があります。イエスのおそらく最初にして最後の、そして最大の自己感情の吐露が、マンによれば、「引用」だったのです。イエスの叫びは単なる肉声ではなく、旧約聖書詩編第22章冒頭の言葉でした。マンは主張します、「人生、とりわけ意義深い人生とは、古代においては生身の体に神話を再現する」ことであると。イエスが布教活動を始めたのも三十歳でしたが、こうした営為も旧約聖書の預言者たちの「まねび」、例えば三十歳で神の召命をえたエゼキエルからの「引用」だったのです。以上の観点からしますと、ニーチェのツァラトゥストラは、ゾロアスター、イエス、旧約の預言者たちの驥馬に付します。そして、時を経て、二十世紀ドイツ文学においても、「三十歳」の神話が再現されていたのです。

第二次世界大戦後、このような系譜に再び踏み込んだ女流作家がいました。戦後ド

イツ文学を代表するインゲボルク・バッハマンです。総じてバッハマン文学は、新しいことばを探りながら、新しい男女のあり方、新たな人間存在、「どこにもない場所」を模索します。そしてバッハマンが三十歳の頃に書いた物語がまさに『三十歳』（生野幸吉訳、白水社『新しい世界の文学』第29巻所収）でした。この作品は、自己喪失に陥った主人公が過去を清算して旅に出るところから始まり、死からの復活を意識するところで終ります。その時、主人公は三十歳の誕生日を迎える直前にいました。

文学においてはなんと模倣と創造の営みが、人間の生においてはなんと意識と無意識が、分ち難いのでしょうか。ひとは三十にして立つ。ドイツ文学は我々に改めて而立の意味を問いかけます。

執筆者紹介
小黒　康正（おぐろ　やすまさ）。
九州大学大学院人文科学研究院教授。